
少女マンガのように

太智愛 陽子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女マンガのように

【Nコード】

N76750

【作者名】

太智愛 陽子

【あらすじ】

ひよんな事から4人の生活が始まる。規約と期限付きですぐに終わるはずだった。自分の恋愛には関心のない舞と自分が生きていくことで精一杯、今時の女子達の甘い生活を蔑視している祐哉。二人の恋の行方は・・・？

1、それぞれの朝

まだ辺りが薄暗い中、舞は起きだした。
ものをかき分け、家から出て行く。

荒ゴミの山を丁寧の一つ一つ確かめる。

「もったいない。これはまだ使える。」

山の中から宝物を見つけたようにDVDデッキを取り出した。

今日は荒ゴミの日。月に2回あるその日は早くから起きだして収集場所を歩いて回るのが舞の習慣になっていた。

「¥500円にはなるかな。」

まだ使えそうなものをネットオークションでお金に換金するのだ。

「これは¥200くらいか、他も見てからにしようっと。」

ちよつと重そうな傘立てに目をつけておいて、舞はまた別の収集場所へと歩いて行った。

ブルッブルッブルッ。

携帯の振動で祐哉が目を覚ます。

「はい。」

寝ぼけた声で返事をする。

「おい、お前今日付き合え。」

電話の向こうの上機嫌な友樹に何かを感じて

「時間ない。」と不機嫌そうに答えた。

「友達の頼みが聞けないって言うのか？頼むよ、今日の相手はお嬢様もいるんだ。お前が来ないと断るって言うんだから、絶対だぞ。」

合コンが大好きな友樹は祐哉をだしにして条件のいい女の子達と飲もうとこれまでも何度か頼んできた。

「今日はいい。」

面倒そうにそう言って電話を切ろうとした祐哉だったが「今度のレポート」その言葉に手を止めた。

電話の向こうでしめしめといった空気が流れている。

「月曜日だけど出来てるのかな？お前の分ももう用意してあるけど？」

ワザと語尾を上げた言い方に眉がピクンと動いた。

大学生活で優秀な友樹に祐哉は何度も助けられている。

友樹がいなければ毎年単位は取れていなかっただろう。

仕方がない。

「わかったよ。」

いやそうに承諾した。

「それから今日から俺、住むとこないから、何が何でもお嬢様をゲットして永住先を見つけるからな、お前も協力しろよ。」

付き合う度、女の子の家に転がり込んで自分の部屋を持たない友樹が次の標的を見つけようとしていた。

「じゃあ後で。」

嬉しそうな声で友樹が電話切ったので、祐哉はもう少し眠ることにした。

台所からおいしそうな匂いがたちこめている。

その匂いに誘われるように知華は目を覚ます。

「おはよう、今日は何？」

支度をしている舞の後ろから覗きこんだ。

具沢山のお味噌汁を見て

「いいものが見つかったの？」

収穫日に収穫があつた時のメニューだ。

舞は嬉しそうに笑った。

玄関先には朝の戦利品が並んでいる。

「その性格はどこから来たの？」

小さいころから知っている知華が不思議そうに言う。

そして昨日遅かったせいで舞と顔を合わせていなかったからと話を続ける

「そうだ、今日合コンがあるから参加して欲しいんだけど。」

「なんで私が？」

「どうしても一人足りなくて、麗美が噂のイケメンが来るから必ず舞を連れて来いって。」

麗美は父が会社の社長のせいでお金持ちを気取っている。

舞を普段から見下したような態度を取ってくるのだ。

知華が舞と仲良くするのも良く思っていないようで何かと意地悪をしてくる。

今日もきつといい引き立て役にしてやろうと思っているに違いない。そんな事には全く興味のない舞は行くつもりなどなかった。

しかし知華は知り合ってから好きな人すらいた様子も無い友人にせめて出合いの場を作ってあげたかった。

わざわざ紹介などをセッティングしても絶対来るはずも無いのでこの機会を逃さぬよう

「コンパ代、舞はタダでいいって。どうする？」

タダって言葉に弱い舞をからかうような目で見る知華。

「なら行かないとね。」

乗り気ではなかったが夕食分が1食浮くと思つたら、断われるはずもない。

「お願いだから残ったものをお持ち帰りするのだけはやめてね。」

「どうして？」

舞がどんな時でも必ず残った者を持ち帰るのを知華でさえ時々恥ずかしくなる事がある。

麗美の前でそんな事をすればまた何を言われるか。

「その代わり明日、あのケーキ買ってきてあげるから。」

舞はなぜか良く分からなかったがケーキにつられてつい

「わかった。」と返事をした。

2、出会い

「遅れてすみません。」

舞を連れて知華がみんなに挨拶をする。

お嬢様との合コンだからと男性陣が張り切って高い店のそれも個室を予約していた。

その場の雰囲気になじめない舞の出で立ちをちらつと麗美が睨みつけた。

「どうぞ、どうぞ。」

幹事役の健が声をかける。

会はずでに始まっていた。

「揃ったところでまずは自己紹介から。」

興味ない舞はさっさと並んでいる物を食べ始めた。

脇から知華が服を引っ張った。

「？」

食べるのに夢中だった舞に

「舞、自己紹介。」

コンパなんて初めての舞はただ座って食べていればいいと思っていたのだ。

「有李栖 舞です。」

それだけ言ってまた食べ始めてしまった。

知華は親友の行動に冷や汗が出た。

「この子、合コンが初めてなもので。」

その場を取り繕うように言い添えた。

「なんていう女だ。いや女でもなく地球外生物なのかも。」

祐哉はぼそりとつぶやく。

「祐哉さんて彼女とかいらっしやるんですか？」

みんなとの会話が弾みだした頃、麗美は目をキラキラさせ精一杯愛らしく尋ねる。

他の女の子も興味津々だ。舞を除いては。

「さあ？」

女性のそんな態度に飽き飽きしている祐哉は声を出すのも面倒なのだ。

雰囲気をぶち壊されまいと

「いません、いません。誰か面倒見てくれそんな人はいませんか？ちなみに僕もフリーです。かわいそうな僕たちに愛の手を」

友樹がおどけてみせた。

「ゲームでもやろうか。」

健がさらに盛り上げようと提案した。

「仲間はずれゲーム、知ってる？」

知らない様子の人達の為に説明を始める。

「質問は順番ね。両手を机の上に出してYESなら右手をNOなら左手を引つ込める。」

分かりやすいように右手はパーで左手はグーね。人数の少ないほうが負け。罰ゲームは好きなお酒でいいから1杯ね。」

「いや・・・」

祐哉が言いかけたところで友樹がそれを制止した。

「レポートはいいんだな。」

小声ながら痛いところを突いてくる。

友樹を信用出来なかったがレポートの事を言われて祐哉は仕方なく押し黙った。

「では最初は僕からね。今日ここへバスで来た人。」
無難な質問する健に続き

「帰りはタクシーの人。」

お互いの状況を知ろうとする質問は初めは遠慮がちに。

「今、親と同居している人。」

徐々に興味深い質問へと変わっていく。

男の子からすると親と同居がどうかは付き合う上でも重要な一つだ。男性陣からはナイスな質問だと歓声が上がった。

楽しく進みゲームは盛り上がっていた。

ラッキーなことに祐哉はまだ飲まずに済んでにいた。

「はい次。」

待ち構えていたように祐哉の反応を知ろうと麗美が質問する。

「今日この中に気に入った人がいる人。」

右手が残ったのは祐哉と舞の2人だけだった。

お酒を飲まないといけなくなって困惑している祐哉と反対に舞は嬉しそうにしている。

豪酒の舞は普段は飲まないようにしているがタダとあつては飲まないわけがない。

それもわざわざ飲めというのだから嬉しくてたまらない。

一方祐哉は躊躇していた。

隣の友樹が大丈夫だという風に目配せをして飲むのを促している。

ええいつ。

この場で飲まないのもプライドが許さなかった祐哉はついにお酒を口にした。

「ちよつとトイレ。」

すぐさまそう言っ立ち上がった。

3、ここは何処？

祐哉は暑苦しい空気に目が覚めた。

ぼんやり天井を眺める。

光の差すほうへ目をやって、朝を感じていた。

眠気の残る頭の中には何も浮かんでこない。

急に誰かの手が自分に乗っかかってきた。

「！！」

横を見ると友樹が自分に覆いかぶさって来ている。

状況が読み込めず、体を起こして部屋の中を見渡す。

「昨日俺どうしたわけ？ここ何処だ？？」

ゴミの中にいる自分達。いったい・・・

友樹と一緒に合コンに行った事までは覚えているがどうもその後が思いだせない。

慌てて友樹を揺さぶり起こす。

「おい、友樹、ここ何処だよ！」

どなり声を上げる祐哉に寝たばかりだという風な友樹が答える。

「知華ちゃん家だよ。」

知華ちゃん？そう言われても祐哉には聞き覚えがない。

「おい、だから何処だって！！」

祐哉の大声にもビクともせず友樹はまた眠ってしまった。

「一体どうなっているんだ。知らない家、それにこのゴミの山は・・・」

祐哉はこれ以上この空間に耐えられそうになかったので部屋から出て行こうとしたが

友樹の言った「知華ちゃん」とはどう考えても女の子だろう。

どうしたものかと戸惑いながらそっとドアを少し開けて部屋の外を覗いてみる。

その瞬間、おいしそうな匂いが部屋の中に入ってきた。

誰かが台所に立って食事の支度をしている。
ふと、小さな頃の母親の姿を思い出した。
きゅづぐるぐるっ。

人生の中で今が一番間の悪いタイミングだと祐哉は自分のお腹を呪った。

その音に気がついたようにその女性が振り返ってこっちを見た。
見覚えのない顔。いやどこかで見たような・・・？

彼女が知華ちゃんなのだろうか？

その女性は言葉を発さず、何も見なかったようにまた野菜を刻みだした。

さっぱり様子の分からない祐哉。

「おはよう、大丈夫？」

少し開けたドアの隙間からまた違う女性と目が合った。

誰だか分らないがただ「はい。」と答えてとりあえずドアを閉める。

昨日・・・昨日・・・必死に昨日の事を思い出そうとした。

友樹と・・・

「あっ！！」

記憶の最後に自分がお酒を飲んだ事を思い出した祐哉は慌てて、寝ている友樹を強引に起こした。

「お前いつたい。どうして俺たちここにいるんだ！！」

昨日の合コンの席にいた2人。だよな？

一人はうる覚えだがもう一人は地球外生物。あり得ない。なにもかもあり得ない。

まるで自分が地球外にでも降り立ってしまったかのような驚きの祐哉は眠り続ける友樹を何度も揺り起す。

「あの〜。」

ドアの外からまたも女の子の声が聞こえる。

その声に反応して全く起きる気配のなかった友樹が返事をした。

「あ、はい。」

「よかったら朝食をどうぞ。」

まるで自分の家のように眠たそうな目をこすりながら部屋から出て行く。

「お、おいっ。」

部屋に残っていたくなかったので祐哉は後について行くしかなかった。

テーブルの上にはおかずと温かい味噌汁、湯気の立つご飯が並んでいた。

また子供のころの光景が頭の中に蘇った。

「うわ、おいしそう、いただきます。」

友樹はさっさと食べ始めた。

状況の読めない祐哉が戸惑っていると

「どうぞ。私が作ったんじゃないですけど。」

と先ほどドア越しに目が合った女の子の方が勧めてくれたので

「いただきます。」

と遠慮がちに言ってから食べ始める。

前の席にはあの地球外生物が座り、黙ったまま黙々と食べている。

確かこいつは舞と言っていたな、と言う事は声をかけてくれている方が知華ちゃんって事だな、ととりあえずは誰の家なのかを見当を付けた。

その間も地球外生物は顔も上げず、まるで俺たち2人の存在が見えていないみたいだ。

料理はどれもおいしかった。

温かいご飯にお味噌汁一体どのくらい振りだろう。

これを目の前のこの女が作ったとは到底信じ難たがったが温かくて懐かしさの漂う食卓に安らぎのようなものを祐哉は感じていた。

その時、突然友樹が耳を疑うような事を言い出した。

「あの、もし、その部屋空いてるなら貸してもらえませんか？」

さっき寝ていた部屋を指差してしてとんでもない事を言い出したのだ。

3人はビックリして顔を向けた。

「いや、その、実は昨日から家がなくて・・・」

さらに祐哉の腕をつかんで

「こいつもね、家賃滞納で家を追い出されちゃって、急に敷金とかお金を用意することも出来ないし男が2人もいると女性だけより安心じゃありませんか？」

知華ちゃんと思われる女の子がそれを聞いてご飯を嘔き出しそうになりながら「私はいいいけど。」と笑いを堪え、地球外生物のほうを見た。

無反応な表情の舞に友樹が嘆願する。

「お願いします。少しの間だけでいいんです。敷金とかのお金が貯まるまででいいんです。」

舞はそれにも答えない。

「もちろん、居る間のお金は払います。」

その言葉にピクンと反応した。

しかしまた無表情になって黙りこくっている。

「おい、お前何考えてるんだ。」

あきれて怒鳴り出そうとしたが

「いいじゃない、一部屋空いていることだし、お金も払いますってだって。」

知華ちゃんが楽しそうに言い聞かせようとしているようだ。

「お断りします。」

言われた方は聞く耳ももたない断固とした口ぶりで拒否してる。

そりゃそうだろ。

この話はこれでおしまいと思いきや

「だって住むところが無いなんて可哀想じゃない？」

「そうなんです。可哀想なんです。」

間髪をいれず知華ちゃんと友樹が口を合わせる。

「いや、どっちにしても俺は・・・。」

そう言い出した祐哉の袖をひっぱり

「どうせお前も住むとこないんだからこの際一緒にここに住んだ方

が何かと都合いいだろ？」

一人では気が引けるのか、俺を味方につけようとしているのか友樹が小声で言ってくる。

ここに住む？いやいや、ありえない。こんなゴミ屋敷みたいな家にそれより何よりこの女が承諾するはずもない。

祐哉は考えるだけでも無駄と思っただけ以上何も言わずにいた。

舞は頭の中で計算していた。

家賃に光熱費それだけでも減らせれば画材が買える。いくらでも欲しいものはある。それにうまく言いくるめればあれにこれに・・・いやいや、舞、しっかりするのよ。こんな人達と一緒に住むなんてどう考えても無理よ。

「私、先に学校へ行くね。」

考えるのがばからしくなり舞は先に学校へ出掛けて行った。

4、共同生活の始まり

喫茶店で知華と友樹が話し込んでいる。

「どうやって説得しようか。」

堅物の舞には面白い経験になるだろうと知華は面白がってこの同居生活を始めようとしていた。

友樹も実際に住むところがないし次の居場所が出来るまでいられる場所が必要だった。

「祐哉は俺が何とかするけど、舞ちゃんのほう、大丈夫？」

「私の方は来てからうまくやるから、調子を合わせてくれればいいわ。」

知華はワクワクしていた。

「じゃあ夜に。」

そういつて友樹は祐哉のところへ向かった。

「祐哉、住むところ見つけてやったぞ。」

友樹が嬉しそうに話しかけてきた。

「ホントに？」

「ああ。」

「何処だよ、安いのか？」

まさか知華と会っていたなんて夢にも思っていない祐哉は友達への感謝の気持ちが湧いていた。

「あの家。」

「えっ？」

「だから今日泊まったあの家だよ。」

友樹の口からまた突拍子もない言葉が出てきたので祐哉は驚きを隠せない。

「あの家ってお前、何勝手なこと言ってるんだよ。それに朝断られてたじゃないか。」

「知華ちゃんが何とかしてくれるって。」

自分の知らないうちに話が進んでいるのとなぜ自分まで一緒に住む事になっているのか分からない祐哉は

「ならお前だけそうすればいいじゃないか。俺はごめんだ。」

ゴミ屋敷のような家、それも女が住む家になぜ俺が？友樹の自分勝手な行動に腹が立ってきた。

「頼むよ。さすがに俺一人じゃ無理だろうし、2人のほうが心強いじゃないか。」

「何で俺まで住まなきゃならないんだよ。」

これ以上話したくないと祐哉はその場を立ち去った。

ここで引き下がるわけにはいけない、友樹が追いかけて来て食い下がる。

「お前だつて住むところないだろ。それにこれから先俺に頼みごとしないんだな。」

痛いところをついてくる。しかしそんなことで折れていたら大変になる事は祐哉も分かっていたから今回は聞く耳を持つまいと頑なだった。

「頼む、知ってるだろ俺が行くところがない事くらい。あそこに住まないと本当に行くところがないんだよ。」

そう言つて目の前で土下座した。

そこまでされた祐哉は何も言えなくなつた。友樹にここまで頼み込まれては断ることなど出来るはずがない。

だけど「あの女がOKするとは思えないけどな。」心の中で思ったが言葉にはしなかった。

昨日の約束のケーキを食べながら、ちらちらと自分の様子を窺っている知華。

「どうしたの？。」

なにか言いたそうなのは明らかだ。

「いや別に。」

言いにくい事なんだろうか、心配事なら言ってくればいいのに。

「何かあったの？」

そう聞いても言葉を濁すだけの知華。

そのうちそわそわし始めた。

よほど言いにくい事なのだろう。

今まで二人で暮らして来てこんな事無かったのに。

そうやって気をもんでいた時、

「ピンポン。」

インターホンが鳴った。

「はい、今開けます。」

舞が誰だか聞いているのを聞こえないふりをして知華は急いで玄関へ向かい2人を招き入れた。

「おじゃまします。」

友樹だけがそう言つて、祐哉は無言のまま入つて来た。

舞が知華を睨みつける。

「いったいどういう事？」

「今日からその部屋貸すことにしたから。」

すでに決まったような口ぶりの知華を自分の部屋に引っ張っていく。

「どういふことなの知華、何で勝手に決めてるの？」

「だって住むところも無いっていうし、ほら一部屋空いてるし、ねっ。」

悪びれた風もなく話す知華に怒りが込み上げてきた。

「分かっているわよね、私達の状況。私にはしなくちゃいけない事があるし、あなただってこんな事がばれたらどうなるか。ましてや男の人がこの家に住むなんてありえない事でしょ。」

部屋の外に2人がいるのもお構いなしに大声を上げる。

「何とかなるわよ。それになんか面白そうじゃない。」

舞の怒りを全く気にしていない様子の知華。

「とにかくあの2人を今すぐこの家から追い出して。」
「一歩も引く気はない。」

「じゃあ自分でどうぞ。」

知華の方も引く気がないようだ。こうなったらどうにもならない事を知っている舞は自分で何とかしようと部屋から出て2人を怒鳴りつける。

「あなた達、いったいどういつつもりなんですか？」

どうにかして自分が2人を追い出さなければ。

「直ぐにここから出て行って下さい。ずうずうしいと思わないんですか？無神経な人とは一緒に居られません。とにかく早く出て行って。」

舞はわめき散らした。

「すみません、でも僕ら本当に行くところがないんです。」

そう言つて祐哉の時と同じように友樹はまた土下座をしたのだった。舞は驚いたがここで怯むわけにはいかない。

「そんな事を言われても私達には全く関係のない事です。あなた達に部屋を貸す義理もありません。」

頑なに出て行かせようとする。

「僕には両親も兄弟もいません。だから頼る人もいなくて、ここに置いてもらわないと寝るところだってどこにもないんです。」

ここに住もうと嘘をついているとしか思えなかった。

「そんなウソまでついて、あなた恥ずかしくなんですか。」

それまで黙っていた祐哉が急に声を出した。

「何も知らないくせに。」

「え？」

「今の言葉取り消すんだ！」

祐哉は舞に向つて言い放った。

「あなたいったい何の権利があつてそんなこと言ってるんですか？だいたいあなた達は・・・」

舞の言葉を遮つて、祐哉が怒り出した。

「ウソ？恥ずかしいだつて？何にも知らないお前がこいつにそんなこと言う権利があるのか？」

「権利ですって？人の家に上がり込んで勝手にここに住むなんて話をしておいてそっちこそ何の権利があつてそんなこと言ってるんですか？」

「もういい、友樹、こんなことまで言われてここに住む事ないだろ。こんななんだったら公園で寝る方がよっぽどましだろ。」

友樹の腕を掴んで出て行こうとした。

しかし友樹はその腕を振り払い

「いやだ、二度と公園なんかで寝たくない。お願いします。何でもしますから、少しの間、お金が貯まるまでだけでもここに置いてもらえませんか？」

「本当に身寄りもないらしいの、しばらくだけ居させてあげない？」友樹の必死さと知華の言葉に何も言えなくなつて舞は自分の部屋へ入つてしまった。

舞は部屋にこもつたきり出てこない。

友樹が心配そうに知華に聞いた。

「やっぱり無理なんじゃあ？」

「大丈夫、安心して。」

舞の性格を知っている知華には確信があつた。その時ドアが開いた。

バンッ！！

舞が紙をテーブルに叩きつけた。

「同居契約書」そう書かれている。

「これが守れるなら同居してあげてもいいわ。」

知華がにやりと笑った。

1. 期限は最長3カ月とする。

敷金を貯めることを思えばこれ以上は必要ないと思います。もちろんこれより早く出て行くのは構いませんから。

2．同居の事は誰にも話さない。お互いの生活に干渉しない。
今の生活を知られたり、乱されるような事があれば即刻出て行つて
もらいます。

3．部屋以外にどんな小さなものも置かない。

例えば靴も帰ったら自分の部屋に持ち帰ること。洗濯物も自分の部
屋の中に干してください。

4．ほかの部屋に入らない、覗かない。

特にあの部屋（部屋の方を指差して）の事は聞くことも禁止です。

5．月に一度こちらが指定した日は午後9時まで家に入らない。
出来るだけ事前にお知らせしますが急な事もあるのでそれも了承く
ださい。

6．お金について

まず家賃折半、光熱費はいつも基本料金内でしか使っていないのでそ
れを折半でそれ以上の分はそちらに持つてもらいます。あつ、電話
は使用禁止です。かかってきたのも絶対に出たりしないでください。
それからトイレトーパーや洗濯洗剤はもちろんお金のかかっ
ているものを勝手に使った場合はその都度頂きます。

それと当たり前の事です。が家事は分担制にします。洗濯は各自、朝
と夜の食事はこっちで掃除はそちらがどうですか？2人が領いた
のを見て、もちろん食べた分の材料費は頂きますと付け加えた。

7．上記以外についてはその都度相談して取り決める事。

今後不都合な事も出てくると思うのでとにかく勝手な行動だけは慎
んでください。

守れない場合は即刻この契約は解消させてもらいます。

ひとつひとつ補足しながら一通り説明して後は委ねるといった様子
の舞。

友樹と知華に文句はなかった。

まさか彼女が了承するとは思っていなかった祐哉は驚きを隠せない。

「あの、俺は遠慮・・・。」

言いかけた時、友樹となぜか知華ちゃんにまですごい形相で睨まれた。

確かに一緒に住めばしばらく住む所の心配はしなくて済む。

その間に次の部屋を見つければいいかとこの状況に乗る事にした。

「この6番の夜の9時までって何時から？」

不思議な内容に祐哉が尋ねる。

「それは決まっていらないので今は言えません。朝早くから叩き起すことはないので心配しないでください。」

不可解な答えだったが月に一度くらいならとそれも了承することにした。

祐哉が契約内容はお互いというのを強く主張した後、4人はそれぞれ書面に署名した。

きれいな好きな祐哉は早速、耐えられないゴミの山を片付けようと部屋の掃除を始めた。

「ちよつとストップ!!」

慌てた舞が止めに入って来た。

「勝手に動かしたりしたら分からなくなるわ。それから物を捨てる時には必ず確認してからにしてください。」

「いきなりかよ。」

祐哉の手に持ったものを取り上げようとする舞に続けてたしなめる様に

「自分の書いた契約書守ってもらえませんか？」

「何をです？」

「人の部屋は覗かない、入らない。だろ？」

面喰ったように

「あの、それは・・・とにかく大切なものばかりなんです。だから勝手に動かされると困るんですけど。何かあったら弁償してもらいますから。」

祐哉の言う事は当たっていたがここで負けてはいけないと舞は強引に言い放った。

「それじゃあ俺たち、寝る場所ないんですけど。家賃を払うのにこんなゴミばかりの部屋じゃ耐えられないんだけど。」

「分かりました。片付けますからちよつと待ってください。」

とりあえず荷物を部屋のすぐ外へ運び出した。

「こんなところに置いて掃除するときはどうするんだよ。直ぐに捨てるか自分の部屋に持って行けよ。」

横柄な態度にまたムカついた。

「急に来て、住まわせてもらって文句ばかり言わないでもらえます？」

「文句って、俺は正当な主張をしているだけで文句言ってるのはそちだろ。女なんだから少しは片付けたらどうなんだ。」

「あなたに女なんだからと言われる筋合いはありません。」

「私が明日やるから。」

「まあまあ。」

見かねた2人が止めに入った。

納得できない様子の祐哉と舞は各自の部屋に入ってドアを閉めた。やれやれとこの先を思い2人はため息をつく。

舞と祐哉は布団の中でも気が治まらない。

「あいつ無神経だわ。」

「あいつ何考えてんだ。女じゃねえ。やっぱり地球外生物だ。」

そうやって共同生活第一日が終わった。

5・共同生活 第一日目

朝、体に重さを感じて目が覚めた。

目の前には友樹の顔があつて、首には手が太もものところに足が乗っている。

俺は抱き枕か。

ため息と共に起き上がり乱暴に友樹の体を剥がすと彼は祐哉が寝ていた所を寝ぼけながら温かさを求めて続けている。

可愛い奴。

クスツと笑つて、友樹は午後からと言つていたからもう少し寝かししておく事にした。

時刻は7時。

そおつと着替え始めた時、大きくドアが叩かれた。

「朝ですよ。ご飯出来ました。」

その声に友樹がもそもそと動き出した。

せつかく俺が寝かせておこうと思つたのに。

ぶすつとしたまま部屋を出ると地球外生物が台所とリビングの間をバタバタと行き来している。

それを無視して洗面台に行くと知華ちゃんのほうが寝ぼけながら顔を洗っていた。

「おはよう」と挨拶され、そっけなく「おはよう。」と返す。

その後ろから「いただきます。」と元気な声が聞こえた。

友樹のやつ、寝起き悪いはずなのに。

テーブルに近づくとこの間と同じ温かいご飯にお味噌汁数種のおかずが並んでいる。

ついさつきまで寝てたとは思えないスピードで食べている友樹はおかわりがあるか聞いている。

自分でよそいに行こうとする友樹の代りに知華ちゃんが入れに行つてくれている。

「あと一杯分はあるから祐哉さんもお代わりしてね。」
「ありがとう。」と返事をしたが結局それも友樹が食べてしまった。
「やっぱり男子は食べる量が違うわねえ。」
ニコニコ笑う知華ちゃんの横で「今度からもう少し炊いておきます。」と地球外生物がぼそつと言った。

祐哉は今日、朝から気分がいい。

月に一度の特別な時間を過ごせる日だから。

目の前には少女漫画が積み上げられている。

ネットカフェで誰の目も気にせず大好きなマンガを読みふける、友樹にも教えていない唯一の趣味。

知られたら何を言われるかわからないからこれからもこれは秘密。

この時間だけは誰にも邪魔されたくない。

お気に入りのマンガを何度も真剣に読み返し、満ち足りた気分幸せを感じていた。

その時電源を切り忘れていた携帯が震えた。

集中しているところを無理やり途切れさせれ祐哉はチツと舌打ちし、相手を確かめもせずバッテリーを外した。

最近ストレスが溜まっていたのかいつもより1時間延長してしまった祐哉が家に着いたのは夜の九時近くになっていた。

夕食がいない場合その日の夕方5時までに連絡する事になっている。

残りものでも外で食べるよりは安く上がる、そう思い知らない連絡はしていない。

しかしテーブルの上には何もない、台所に入っても綺麗に片付いている。

何かあるはずだと冷蔵庫に手をかけたところで後ろから機嫌の悪い声が聞こえてきた。

「今から食べるんですか？」

「ああ。」

返事を聞いた途端、不機嫌度がさらに上がったまま地球外生物は押しのけるように自分が冷蔵庫の前に立った。

いらない連絡はしていないのだから当然ではないか。

彼女に態度にせっかくの良い気分すら吹き飛ばされてしまった。

「ちよつと時間かかるのでお風呂にでも先に入って下さい。」

その言葉からご飯の用意をしてくれるらしい事がわかったのでもしぶではあるが厭味のひとつも残さず黙ってそれに従った。

テーブルにはから揚げに野菜炒め、朝とは違う具の入ったお味噌汁そのどれからも湯気が立っていた。

まさか出来たてのものが食べられるなんて思ってもいなかった祐哉は風呂場で言った彼女に対する厭味に反省した。

「こんなの毎日やられたらたまらないわ。今度から時間がずれたら別料金頂きますからね。」

反対にぶちぶち厭味を言いながらも、祐哉のおかわりのご飯をよそい、食べ終わると部屋へ入って行ってしまった。

そして地球外生物が地球の中に入ってきた。

しかしまだ祐哉はこの事に気がついてはいない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7675o/>

少女マンガのように

2010年12月4日20時44分発行